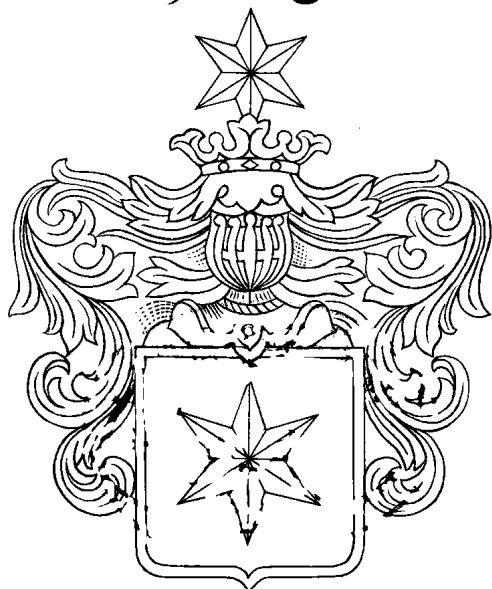


Goethes Werke



ゲーテ全集

潮出版社

Goethes Werke

ゲーテ全集 6

1979年5月10日 印刷 1979年5月25日 発行

訳者 神品芳夫
浜川祥枝
前田和美
石井不二雄

発行者 富岡勇吉

発行所 株式会社 潮出版社
東京都千代田区飯田橋3-1-3 (〒102)
電話 販売部(03)230-0741
出版部(03)230-0781
振替 東京 5-61090

定価 2900円

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 牧製本印刷株式会社

© 1979, Printed in Japan

乱丁・落丁本は送料弊社負担でお取り替えいたします。

目次

若きヴェルターの悩み

神品芳夫訳 5

親和力

浜川祥枝訳 103

ノヴェレ

前田和美訳 335

ドイツ避難民閑談集

石井不二雄訳 359

訳注 454

解説 459

ゲーテ全集

第六卷

装帧・中林洋子

若きヴェルター
の悩み

(初版)

かわいそうなヴェルターのことについて調べのつく限りのことを調べてみた。それをここにお目にかけてたい。読者の皆さんにはきつと喜んでいただけたらと思う。きつとヴェルター一の精神や人柄を讃え、彼を好きになつて、彼の運命に涙を抑えることができない思いをなさるだろう。

ヴェルターと同じ情熱に悶えている人なら、彼の苦悩を知つて、そこから慰めを汲んでくれるとうれしい。このささやかな書物をあなたの友だちにしていただきたい、もし運命のせいか、あるいはご自分の不手際で、ほかにもつと親しい友をおもちになれないのだら。

第一節

一七七二年五月四日

別れてきて、気がはればれしている。親しい友よ、人間の心とはなんたるものか。あんなにも親しくなり、離れがたく思っていたきみと別れて、しかもはればれしているとは。こんな言いかたを許してくれるね。だって、きみ以外の人間関係はすべて、ぼくのような人間の心を苦しめるために運命がわざわざ選んでくれたのではないかという気がする。かわいそうなレオノーレ。でも、やっぱりぼくに責任はなかったよ。彼女の妹の個性的な魅力をたのしんでいたばかりに、おねえさんのあわれな胸に情熱の火がついてしまっただけだからね。しかし待てよ——ぼくにまったく責任がないだろうか。ぼくが彼女の想いをかきたてるようなことをしなかっただろうか。自然そのもののような彼女の物の言いかたは、どんなに真剣であっても、しばしばわれわれを愉快にさせるものだから、ぼくもその自然のあらわれを見て、ついたのしんでいたのではなかったか。あ

るいはまた……。ああ、自分のことを嘆く能力をあたえられているなんて、人間とはなんたる存在だろう。ぼくはね、きみ、きみに約束するけど、自分を建て直してみるつもりだ。いままでいつもやってきたみたいに、運命がわれわれに課してくる忌まわしいことを思い出してくよくよするのには、もうやめるつもりだ。眼前にあることにつねにたのしみを見いだし、過ぎ去ったことは忘れてしまいたい。たしかにきみのいうとおりだ。人間が——なんとも因果なものだが——想像力をせつせと働かせて過去の忌まわしい事柄を思い出すなどということはやめにして、味気なくとも現在に耐えてゆくよう努めるとしたら、人間界の苦惱もかなり減少するだろう。

母に伝えておいてくれたまえ、話は順調に進んでいるので、近いうちに報告するとね。伯母とも面会した。うちでは伯母はひどいひとだということになっているが、会ってみると、ぜんぜんそんなことはない。活発で、気性は烈しいが、根はいいひとだ。ぼくは伯母に、遺産の分け前がもらえないままになっていることについて母の苦情を伝えた。伯母はそうなっている理由を述べ、原因を説明し、いくつかの条件を整えばすっかり引き渡すといっている。しかもその額はわれわれの要求を上回るものだ。——とにかく今はそのことを書きたくない。母に、万事うまくいっていると伝えてくれ。それにしても、きみ、今度のささやかなこととでまたぼくは、世のいさかいのものと策略や悪意よりも

ちよつとした誤解や怠慢であることのほうが多いのだということをふたたび思い知った。少なくとも策略や悪意がからんでいることのほうがまれなのだ。

ところで、ぼくはここへ来てたいへん元氣だ。孤独がぼくの心にとつて、この楽園のような地方で高価な清涼剤のような作用をしてくれる。若々しい春の季節が、ここえがちなぼくの心をいっぱいにみなぎらせ、暖めてくれる。どの木も、どのしげみも、咲き匂う花束となつてゐる。そこでぼくは黄金虫となつて、芳醇な花の香りの海のなかを這いまわり、そこに自分の食べ物を見つげたいと思つてゐる。

町自体は快適でないが、町の周辺には筆には尽くしがたい自然の美がある。死んだM……伯爵はこの自然美に感動してここに庭園をつくつた。丘がいく重にもかさなつて自然の多彩な表情を示し、すばらしい起伏を生み出している。庭園は簡素なものだ。入ればすぐに、この庭を設計したのは学者タイプの造園家ではなく、感ずる心をもつ人であり、自分でたのしみたくてこれをつくつたということがわかる。ぼくはその朽ちかけたあずまやで、いまは亡きその主のためにいくたびも涙を流した。そのあずまやは故人の好きな場所だつたが、今はぼくの好きな場所にもなつてゐる。やがてぼくはこの庭園をわがものとするだろう。この庭師はぼくを氣に入つてくれている。もっとも数日前に知り合つたばかりだが。ぼくがここでわがもの顔しても、彼がいやな思ひをすることはないだろう。

五月十日

胸いっぱい晴朗な氣分がみなぎつてゐる。かぐわしい香をふくむ春の朝の大氣を思う存分吸ひ込むときのようだ。このあたりの風景は、まるでぼくみたいな人間のためにつくられてゐるらしく、ここでこそひとりぼつちで、自分の生活をたのしめる。友よ、ぼくは幸せだ。ただ、おちつた生活感情にひたりきつてゐるので、芸術のほうはどうもうまくいかない。今のような状態ではスケッチもできない。線一本引くこともできそうにない。それなのに、ぼくはかつて今ほど偉大な画家だつたことはないのだ。うるわしい谷がけぶるごとくぼくをつつみ、ぼくが散策する森の暗がりの尽きるところに太陽が空高く休息しており、聖なる森の内部にはいくつかの光線が忍び込んでくるばかり——そんなときぼくは、せせらぐ小川のほとりの丈高い草むらに身を横たえて、草のさまざまな生え方を地面からつぶさに観察する。草の茎のあいだにうごめいてゐる小さい動物、虫や蚊など、無数のえたいの知れない生き物のむらがりや身近に感じる。そこでぼくは、われわれを自分の姿に似せて削つた全能の神の存在を感じる。永遠の歡喜のうちにわれわれをただよわせながら支えてくださる神の愛の息吹きを感じる。そうすると、あたりのものがかすんできて、ぼくのまわりの世界と空全体が、恋人の姿のようになって心

のなかにまとまる。そんなときにひたすらに願いをこめて考える、「これが絵に画けたらなあ。ぼくの内部にみなぎっているこの生気をそのまま紙の上に移すことができれば自分の魂が永遠の神の鏡となり、画面がこの魂の鏡となればなあ」と。ところが、友よ、ぼくにはできない。あまりに壮麗な自然の現象におしひしがれてしまう。

五月十二日

この地方には人をまどわす霊がただよっているのか、それともぼくの心のなかに超人的な空想力がひそんでいて、それが周囲のあらゆるものにこの世のものならぬ美しさをあたえるのか、どちらであるか、わからない。町を出たところに泉がある。水の精メルジーネがその姉妹と一緒に水にひきよせられたように、ぼくはその泉にひきつけられる。小さな丘を下りてゆくと、アーチ型の入口がある。そこから二十段ほど段を下りると、そこに大理石の岩があって、澄みきった水が湧き出ているのだ。上方には簡素な壁が囲いをつくっていて、広場の周囲は高い木立がつつみ、空気がひんやりしている。すべてに、人の心をひきつけてやまない何かがある。ぼくは毎日、一時間はここにきて過ごすことにしている。町の娘たちもここに水を汲みにくる。それはおよそ最もけがれのない仕事であり、またどうしても必要な仕事なのである。かつては王様の娘たちも水汲みを

したというではないか。そこに坐っていると、遠い祖先の時代の光景がありありと浮かんでくる。ぼくたちの祖先の人々が泉のほとりで互いに知合いになったり、求婚したりしているありさま、そしてそのとき泉のまわりには善良な霊がとびまわっているさままで、はつきりと見えてくる。このことを感じとれない人がいるとすれば、それはつらい夏の一日の放浪ののち、この清涼な泉に立ち寄って、ほんとうに生き返るような気分になったことのない人にかがいない。

五月十三日

ぼくの本をこちらへ送ってくれるというのかい。いや、たのむからそれだけはやめてくれたまえ。もう人からヒントをもらったり、元気づけられたり、刺激を受けたりしたくない。なにしろぼくの心はそれでももういやというほど湧きたっているのだから。必要なのはゆりかごの歌だが、それはぼくの親しいホメーロスのなかにたつぷり見つかると。たぎる血をその歌でなだめて寝つかせることがじつにしばしばある。ぼくの心ほど不安定で変り易いものはないと、きみも思うだろう。こんなことをきみにいうまでもないね。なにしろきみは、ぼくが悲しみに沈んでいるかと思うと羽目はずしてわめき出したり、甘美な憂愁にひたっているかと思うと烈しい情熱をぶちまけたりするのに

これまでさんざん付き合わされてきたのだから。自分でも、ぼくは自分の心を病気の子供みたいにもてあまして、その子のしたいことはなんでもさせている。でも、これは人はいわなくてくれ。こういうことを悪く取る人が世間にはいるのでね。

五月十五日

土地のいくらかの人たちと知合いになり、ぼくに親しみをもつてくれる人もいる。特に子供たちがそうだ。ちよつと悲しい観察もした。はじめのうち、子供たちの仲間に入つて、親愛の気持からいろいろなことを彼らに尋ねたのだが、ある子供たちは、ぼくがからかおうとしているのだと思つて、ひどくそつけない返事をした。ぼくはそんなことで気を悪くはしなかつたが、ただ、これまでもしばしば氣付いていたことを、またあらためてひしひしと感じた。ある程度の身分をもっている人々はいつも庶民から距離を保つていようとするようだ。まるで庶民に近づくと身分を失うとも思っているかのようである。またその一方では脱落者とかたちの悪いおどけ者などもいる。この人たちは自分をおとしめてみせるが、それも結局のところ自分たちの優位を貧しい庶民にいっそう強く印象づけるためにほかならない。

人間は平等ではないし、平等であり得ないということも、

よくわかつている。けれども、威厳を保つために庶民から距離をとることが必要だと思ふ人も、負けるのがこわくて敵の前に姿を見せない臆病な人も、どちらもよろしくないと思ふ。

このあいだ例の泉のところへ行つたら、若い女中さんが水を汲んだ桶を階段の一番下の段に置いたところだった。そして、桶を頭の上にのせるのを手伝つてくれる仲間がこないかと思つて見まわしていた。ぼくは階段をおりていって彼女を見た。「手伝いましょうか、娘さん」とぼくは言った。彼女はみるみる赤くなつた。「いえ、結構です」と彼女は言つた。「遠慮することないよ」——彼女は台座を頭に置き直した。そしてぼくが手をかしてやつた。彼女は礼をいって、道をのぼつて行つた。

五月十七日

いろいろな知合いができたが、仲間というほどのものはまだ見つからない。ほかの人から見れば、ぼくにどういふ魅力があるのかわからないが、とにかく皆さんの人がぼくに好意をもつてくれる。愛着をすら示してくれる。ただ、ここのつきあいはごく短い期間のことだと思ふと、じつに残念でならない。この人たちはどんな風かときみが尋ねるなら、ほかのところと同様だ、と答えるほかはない。人間というものはみな似たりよつたりだ。たいいていの人たち

は時間の大部分を生存するために費やし、わずかに残った自由な時間をもてあまし、いろいろな手を使ってその時間をつぶそうとする。これが人間のさだめなのだ。

でも、気のいい人たちだよ。ときどきぼくも自分のことを忘れて、この人たちと一緒に、人間にまだ許されているたのしみを味わう。おいしい食事をするとか、あけっぴろげに言いたい放題のおしゃべりをするとか、ころあいをみて遠乗りや舞踏会を企画するとか、こういうことはぼくにとってじつにありがたい。ただ、こんなことをしていると自分のもっているいろいろほかの能力が使われずに腐ってしまふ、などと思わないことが肝心だ。たのしんでいるときは、ほかの能力は出さないうまい込んでおかねばならない。それを思うと、胸が締めつけられることもある。——とはいえ、誤解されるということはわれわれ人間の宿命だ。

思えば、ぼくの若き日の恋人は今ももう亡い。あのひとと知り合ったとは、なんというめぐり合わせだったろう。

あの出会いがなければ、ぼくは自分に言いよせさせるだろう。「おまえはバカだ。地上では見つかりっこないものを探し求めている」——しかしぼくには彼女がいた。あのおおらかな心に触れ、彼女と一緒にいると、自分が自分以上の人間になったような気がした。自分の能力が最大限に發揮できたからだ。ありがたい神よ、あるときぼくの魂のもつ力のうち一つでも働いていないものがあつたらうか。ぼくの

心と大自然とを結びつけてくれるあのすばらしい感情を、彼女の前にいるときには思う存分に繰り広げることができた。ぼくと彼女の交際は、こまやかな感覚と鋭利な知性を紡ぎ合わせた織物であつて、知性が編み出す気の利いたことばは、少し品の悪いものまで、天才のひらめきを帯びたものだった。それが今は——ああ、あのひとのほうに年上であるばかりに、ぼくよりも先に墓の下へいつてしまった。ぼくはあのひとのことを忘れないだろう。あのしつかりした精神と、神々しいほどの忍耐力を。

数日前、若いV……という男に会つた。率直な人間で、じつに整つた顔立ちをしている。大学を出たばかりのところで、自分を格別偉いとは思っていないが、ほかの人よりはものを知っていると自負しているようだ。いろいろおしゃべりしたところから察するに、事実なかなか勉強家だ。要するに、相当の物知りだ。彼はぼくが絵を画き、ギリシア語ができるということ聞き込んで、ぼくをたずねてきた。画才とギリシア語というと、ちよつと聞かえがいのだ。彼はたくさん知識を並べてみせた。バトオからウツド、ド・ビルからヴィンケルマンにいたるまで。そして彼がズルツァー論文の第一部を読破していること、古代ギリシア研究に関するハイネの原稿を所有していることを、ぼくに認めさせた。なるほどと、承つておいたよ。

もう一人、立派な人物と知合いになつた。公爵領の執政官であつて、率直な、誠実な人間だ。お子さんが九人もい

て、子供たちに囲まれていて彼を見ると心がたのしくなるという話だ。特に一番上の娘さんがたいへんな評判になっている。彼はいちど遊びに来ないかと誘ってくれた。近いうちにたずねてみるつもりだ。彼はここから一時間半ほどかかる狩猟用別邸に住んでいる。奥さんが死んだあと、市内の公邸に住むのがどうしてもつらくなつたというので、そこへ引越すお許しを得たのだそうだ。

ほかにも数人、風変わりな男がぼくの前に現われたが、どれもみんないやらしいやつだ。友情の押し売りをされるのが一番がまんならない。

さようなら。この手紙ならきみのお気に召すだろう。もつぱら報告調だからね。

五月二十二日

人間の一生は夢にすぎないということは、すでに多くの人の経験しているところだ。ぼくもこの思いにたえず引きまわされている。たとえば、人間の行動も探求も一定の制約に封じこめられていると悟るときとか、あらゆる行動がいろいろな欲望の満足をめざしているながら、その欲望とは結局われわれの貧しい生活を引延ばすだけがねらいであると思ひ知るときとか、さらにまた、われわれの努力は一定のところまで一段落がつくといわれるが、それは結局夢うつつの諦めにほかならないのだとわかるときなど、そのこと

をしみじみと感じる。一段落といつても、自分をとじこめている周囲の壁に多彩な人物や明るい風景を上塗りするだけのことなのだ。そういうことを考えると、ヴィルヘルム、ぼくは黙り込んでしまう。自分の殻のなかに逃げ帰り、そこに一つの世界を見いだす。いきいきと描写することよりも、予感と暗い願望のなかにこそ世界が浮かびあがる。眼前にあらゆるものがただよい浮かんでくる。そしてぼくは夢見ごっこにその世界を眺めてほほえみかける。

子供たちは、なぜ自分が何かをほしがるか、その理由を意識しない。そのことについては、えらい学者たちの意見は一致している。しかし大人たちだって、子供たちと同様に、この大地の上をさまよい歩いているだけであり、自分がどこからきて、どこへ去るのかも知らず、きちんとした目標を定めて行動することもあまりなく、ビスケットやお菓子や白樺のムチによつていいようにあしらわれているとは、だれも信じたがらないが、これは明白なことだとぼくは思う。

これに対してきみの言いたいことはわかっている。ぼくも喜んで認めるが、たしかに子供のようになり一日一日を生きていける人間は最も幸せだよ。お人形をどこへでも連れて歩いて、着せたり脱がしたりし、ママが菓子パンをしまつておく引出しのあたりを慎重に偵察し、望みのものをついに手に入れたら、しめたとばかりそれを頬張つて、「もつとちようだい」と声をあげる。これはまったく幸せな人

生だ。おそらくまた、自分のいいかげんな仕事や独りよがりの産物に派手なタイトルなどつけて、人類の幸福のために書かれた力作などといって売り込む連中も、その子供たちと似たりよったりだ。そんなことをしていられる人間は幸せだ。しかし、謙虚な気持になって、こんなことがいつたい何のためになるかと考えてみたらどうだろう。幸せな市民がみんないそいそと自分のささやかな庭園を夢の楽園にしようと努め、不幸な人も不平もいわずに重任に耐えながら自分の道を歩き、そしてみんな一様にお日さまの光を一分でも長く拝めるように営々としていることを知ったらどうだろう。それを知った者は沈黙がちになり、自分の内部にみずからの世界をつくり出す。これが人間なのだから、それで幸せなのだ。そうすると、彼の生きる領域は狭くなるにしても、いつも心の中には自由な感情をもっていられる。自分の好きなときに、この牢獄とおさらばすることが出来るのだ。

五月二十六日

きみは昔から新しい土地に根をおろしてゆくぼくのやり方を知っているね。どこかに秘密の場所を見つけて、そこに自分だけのコーナーをつくり、あらゆる制約を克服してそこにしげこむというやり方だ。この土地でもまた、ぼくをひきつけてやまない場所が見つかったよ。

町から一時間ほどの距離のところに、ヴァールハイムという名の村がある。なだらかな斜面に位置していて、たいへんおもしろい地勢だ。坂道をのぼって村へ入ってゆくと、突然この土地一円の眺望がひらける場所がある。愛想のよい元気なおかみさんのいる店があり、ワインやビールやコーヒーが飲める。いや、それより肝心なのは、そこに二本の菩提樹があることだ。二本とも枝を豊かに伸ばして、教会の前の広場をおおっている。広場の周囲には農家や納屋や館などが立ち並んでいる。こんなに人目につかないで親しみ深い場所はめったに見つからないものだ。その広場に店からテーブルを出させ、椅子を出させて、コーヒーを飲み、そしてぼくのホメーロスを読む。ふとした偶然からある晴れた午後この菩提樹の下にはじめてやってきたとき、その広場にはひとげがなかった。みんな傭仕事に出ているのだ。ただ四歳ぐらいの男の子が地面に坐り、まだ半歳ぐらいの子を自分の足のあいだに坐らせて、その子を両腕で囲うようにしていた。つまり、その子のために安楽椅子になつてあげていた。黒い目をきびきびと周囲に配っているが、悠々と坐り込んでいる。この光景に心を動かされて、ぼくは真向かいにあった鋤の上に腰をおろし、この兄弟のありさまをスケッチしてたのしんだ。それに加えてすぐそばの垣根、納屋の戸、こわれた車輪などを、目に入るままに描き添えてゆき、一時間たってみると、構図のよい、なかなかおもしろい絵が出来あがっているのに気がついた。

しかもそこには、ぼく個人のことはぜんぜん取り入れていない。こうしてみると、これからはもっぱら自然に没入しようというぼくの計画の正しさが実証されたことになる。

自然はそれだけできままりなく豊かであり、自然はそれだけで偉大な芸術家となる。規則というものもいろいろの利点をもつといえる。市民社会を讃えるときにも、ほぼ同じ点を指摘することができる。規則にしたがって形成された人間は、趣味の悪い粗悪なものなどつくり出しはしないだろうし、法律と暖衣飽食によつて形成された人間は、がまんのならない隣人や手のつけられない悪人になることはないだろう。ところが一方で規則というものは、だれがなんといおうと、自然の真実な感情や自然の真正な表現を壊してしまうことになる。きみはいうだろう。それは言い過ぎだ。規則は枠を定めるだけだ。はみ出した蔓草を刈り込むためのものだ、と。親愛なる友よ、比喩を使って話しているかい。これは恋愛のばあいと同じだよ。ある青年が女の子に思いをよせたとする。一日のすべての時間を彼女のそばで費やし、彼女に夢中だということをたえず彼女の前でひききするため精力を注ぎ、お金をつかう。するとそこへたとえば公職に就いている役人のような俗物がやってきて、こんなことをいう。すぐれたお若い方、ひとを愛するというのは人間にふさわしいことです。ただし、人間らしく愛さなくてははいけません。一日の時間を配分して、仕事の時間を定め、余暇の時間を女の子との交際にふりむけな

さい。自分の貯金をちゃんと数えて、必需品を買う金を確保した残りで彼女に贈り物などをするぶんにはわたしも反対はしないけれども、ただ、あまりしばしば贈り物をしてはいけません。たとえば彼女の誕生日とか命名日ぐらいにしておくべきです。——その青年がこの忠告に従うなら、有用な若者ができあがるだろう。どこの君侯にもこの人物を任用するよう自信をもつて推薦したい。ただし彼の恋愛はおしまいだ。青年が芸術家であるなら、彼の芸術はおしまいだ。ぼくの友人たちよ、天才という川の氾濫することがめつたにないのはなぜか。はなばなしくあふれ出て、きみたちの心を揺すぶることがめつたにないのはなぜなのか。親愛なるきみたちよ、分別のある人たちが岸辺の両側に住んでいて、なるほど放っておけば彼らのあずまやもチューリップの花壇も野菜畑もすっかりだめにしてしまうところだが、そこを十分心得て、時いたれば堤防や放水路をつくつて、来たるべき危険に対処してしまふからだ。

(原注) 読者は本書に出てくる地名の村がどこにあるのかと探したりなさらないように。やむを得ぬ事情から、地名には変更を加えてあるのであしからず。

五月二十七日

どうやら夢中になって譬え話などしていて脇道にそれ、例の子供たちがどうなったか、終りまで話さずじまいにな